

八木 風輝

1. 事業実施の目的

第 11 回世界モンゴル学会議での研究発表と、博士論文の予備調査の実施

2. 実施場所

①モンゴル国ウランバートル市(学会発表・調査研究)

②モンゴル国バヤンウルギー県(調査研究)

3. 実施期日 平成 28 年 8 月 10 日 (水) から 9 月 6 日 (火)

4. 成果報告

●事業の概要

モンゴル国ウランバートルで 2016 年 8 月 15 日～8 月 18 日に開催された国際モンゴル研究協会(International Association for Mongol Studies)主催の第 11 回世界モンゴル学会議(The 11th International Congress of Mongolists)において発表を行うとともに、8 月 10 日から 9 月 6 日にかけての博士論文に関する予備調査を実施した。

①第 11 回世界モンゴル学会議への参加・発表

世界モンゴル学会議は、社会主義時代の 1959 年に始まった国際学会である。研究大会は 5 年ごとにモンゴル国で開催され、現在まで 10 回の開催実績を誇っている。本年度は「モンゴル研究と持続的な発展」というテーマが設定され、「モンゴルの言語」、「モンゴルの歴史」、「モンゴルの文化・文学」、「モンゴルと国際関係」、「モンゴルの社会・経済」という 5 つのセクションに分かれて発表が行われた。

参加者は約 400 名であり、参加国の内訳としては、中国(主に内モンゴル自治区・新疆ウイグル自治区)、韓国、日本をはじめ、ロシア、ハンガリー、カザフスタン、スイス、アメリカ合衆国、カナダ、オランダ、フィンランド、イギリス、インド、モンゴル国などである。また、専門も主に人文科学、社会科学の研究者が中心で文化人類学、歴史学、言語学、文学、考古学、国際関係学を専門としている研究者らが 8 月 15 日から 8 月 18 日の 4 日間にかけて発表を行なった。

報告者は、「モンゴルの文化・文学」セクションにて、主に音楽・芸術分野の研究を聞いた。その中には、宗教や音楽、芸術の研究者らの発表が行なわれた。報告者の参加した分科会についてその内容をまとめたい。

・「モンゴルの芸術」分科会(8 月 17 日 9 時～13 時)

この分科会では、主にモンゴル国内の芸術や、文化に関心を持つ発表者が集った。この分科会では、「モンゴルのヤトガ(琴)が、テンゲルの楽器として用いられた理由」、「モンゴル人による、オルティンドー(長唄)の文化と、自然の間の関係から」、「ジェプツンダンパ・ホクホト(モンゴルの活仏)の隠された伝記にまつわる 2 枚の写真」、「トゥルク・モンゴルの民俗における民族楽器の神聖な機能に関して」といった内容が発表された。芸術というよりも、他の「モンゴル文化」や「モンゴルの宗教」といった分科会カテゴリに属しないと国際モンゴル研究協会が判断した発表が、「モンゴルの芸術」として構成されたのではないかと思うくらい、統一性のない学問分野の方々が集まった分科会であった。そのため、別の学問的枠組みから質問が投げかけられるという利点も見られたが、「モンゴルの芸術」というカテゴリ自体の議論の統一性がなかった点が残念であった。

②博士論文に関する予備調査

報告者は、モンゴル国内の少数民族カザフ人の音楽文化を研究テーマにしており、今回は、カザフ音楽を歌うモンゴル人と、バヤンウルギー県における音楽家のカザフ音楽演奏の様態に関して調査を行った。

「カザフ音楽を歌うモンゴル人」に関しては、ウランバートルに滞在していた8月10日から8月19日、また9月3日から9月5日にかけて調査を遂行した。ここでは、テレビ番組『カザフ音楽を歌うモンゴル人』の制作ディレクターと出演者へのインタビューを行い、現代モンゴル国で行われる民族音楽の演奏活動の実態を明らかにした。

「バヤンウルギー県における音楽家のカザフ音楽演奏の様態」に関しては、モンゴル国西部のバヤンウルギー県(地図1)に8月19日から9月3日まで滞在し、調査を行った。

この県には、県人口の90パーセントに当たる約10万人のカザフ人が居住している。その中で、カザフ音楽を演奏してきたバヤンウルギー県音楽ドラマ劇場を、報告者は対象として研究を行った。

ここで明らかにしたのは、2点ある。1点目に、現地における民族音楽に関する文献の収集である。これは、主にバヤンウルギー県内の古本屋とホブド大学バヤンウルギー分校の図書館で収集を行った。2点目に、音楽劇場に属する音楽家らへの参与観察とインタビュー調査を行い、基礎データを収集した。

●学会発表について

第11回世界モンゴル学会の芸術パネルで、申請者は3日目(8月17日)にモンゴル国立文化芸術大学にて「ジャンル混淆的民族音楽—モンゴル国のカザフ人による音楽演奏の事例から—」というタイトルで発表を行った。モンゴル国には20近いエスニックグループが居住しており、その中でも、バヤンウルギー県に居住するトゥルク系のカザフ人が、モンゴル国内で2番目のマジョリティとして存在している。同県は、1940年代から社会主義に基づいた近代化を推し進め、1956年に設立されたバヤンウルギー県音楽ドラマ劇場が中心となってモンゴル国のカザフ民族音楽の創造を行ってきた。本発表は、この音楽ドラマ劇場への2014年秋から2015年夏までの長期調査のデータに基づいて、カザフ民族音楽が、現地の伝統的な音楽のみならず、モンゴル、ロシア、カザフスタンの音楽を民族音楽として取り込みながら演奏されている様子を述べた上で、その原因を社会主義時代の文化・芸術政策と彼らの「文化」に対する価値観から明らかにした。具体的には、バヤンウルギー県音楽ドラマ劇場でのコンサートの演目は、モンゴルやカザフスタンの楽曲が中心である一方、「モンゴル国のカザフ音楽」の演奏が非常に少ない。それらの音楽は、カザフ民族楽器オーケストラによってカザフらしさを示す形で演奏される。そうした演奏活動の背景には、社会主義時代から続く、ジャズやヒップホップ、さらにはカザフスタンの軽音楽が取り入れられながら演奏されてきた民族音楽の在り方と、自文化への低評価な価値付けがあることを指摘しながら、「外(国)の文化」を取り入れる演奏実践が生まれていることを明らかにした。

●本事業の実施によって得られた成果

①第11回世界モンゴル学会会議への参加・発表

国際的な研究大会に参加し、世界におけるモンゴル研究の最新の研究成果を研究者間で共有できた。また、研究大会での研究者からのコメント・アドバイスを通じて、博士後期課程で行なう研究の方向性を明確にすることができた。

②博士論文に関する予備調査

「カザフ音楽を歌うモンゴル人」に関しては、音楽家やテレビ制作に関わるディレクターへの聞き取りから、社会主義時代にかけてカザフ音楽を演奏してきたモンゴル人音楽家は、軍楽隊との強い関連性があったこと。そして、カザフ人の親戚・近親の存在が判明した。

「バヤンウルギー県における音楽家のカザフ音楽演奏の様態」に関しては、バヤンウルギー県で社会主義時代に出版された文献の収集を通して、現地の民族音楽の創造過程の一部を明らかにすることが可能となった。ここで収集した書籍は社会主義時代に出版されたモンゴル国のカザフ音楽の楽曲集で、現地の民族音楽形成のために、どの時期にどのような傾向の音楽を収集してきたのかを、詳細に分析することが可能となった。

2点目に、音楽家の民族誌を書くための基礎的なデータとして、音楽劇場内の音楽家のより詳細なライフヒストリーと、音楽家の親族から聞き取りを行った。また、音楽劇場の音楽家の親族と共に生活し、彼らがどのような親族ネットワークを通じて、音楽を聴く/演奏するのかに関する知見を得ることが出来た。

これらの成果は、平成 28 年度の総研大文化フォーラム(於国立日本文化研究センター)において「マイノリティを歌うマジョリティーモンゴル人によるカザフ音楽演奏—(仮)」という題での口頭発表として研究発表を行う他、今年度末に出版予定の『総研大文化科学研究』への投稿(現在査読中)を行なっている。また、その他の成果に関しても、2017 年 1 月の比較文化学基礎演習Ⅱにおけるリサーチプロポーザルにおいて発表する予定である。

また、この事業でバヤンウルギー県に滞在中、1956 年に落成したバヤンウルギー県音楽ドラマ劇場落成 60 周年を記念するための現地の新聞紙の特集にて、報告者の記事が掲載された。これは主に「現地のカザフ人の音楽劇場離れ」の原因に関して、自身の修士論文の一部をカザフ語に訳す形で執筆した。

●本事業について

本学生事業の遂行によって、国際学会での発表と研究者間の交流、そして博士論文執筆のためのデータ収集、今後の具体的な研究の方向性を確認することができた。これは、学生の側からすると、業績等を積む一つ的手段でもあり、また研究の基礎を固める手段として、非常に大きな意味を持つと考える。今後とも、この事業が継続することを強く希求する。